

Part

02

Sufferings and Hardships after
The World War II

北方四島・戦後の苦難

昭和時代

第二次世界大戦における 連合国の合意・宣言

ここでは、第二次大戦後、ソ連による北方四島の占領の経緯と、元島民の方々の苦難について、映像を交えながら紹介します。

はじめに、その理解を深めるため、第二次大戦中の連合国間における合意や宣言について紹介します。

たい せい よう げん しやう 大西洋憲章 1941（昭和16）年8月

米英両国首脳は、連合国の共通原則として大西洋憲章に署名し、領土の拡張を求めない方針等を明らかにしました。1941年9月24日には、ソ連も大西洋憲章へ参加しました。



「大西洋憲章」
出典：米国国務省広報局歴史部ホームページ
<https://history.state.gov/historicaldocuments/frus1941v01/d372>

せん げん カイロ宣言 1943（昭和18）年11月

米英中首脳による連合国の共通原則が確認され、領土拡張は求めない原則が示されます。「カイロ宣言」で連合国は「大西洋憲章」の方針を確認し、領土不拡大の原則を示すとともに、暴力ならび貪欲により日本国が略取した地域等から日本は駆逐されなければならないと表明しています。

北方四島は日本国が略取したものではないことは歴史的経緯に鑑みても明白です。



「カイロ宣言」
1943年12月1日
米国国立公文書館蔵（原：RG59）

きやう てい ヤルタ協定 1945（昭和20）年2月

米英とソ連の首脳は、千島列島がソ連に引き渡されることと樺太（サハリン）の南部がソ連に返還されることを含むヤルタ協定に署名しました。

しかし、「ヤルタ協定」は、当時の連合国首脳間で戦後の処理方針を述べたものであり、関係連合国の間で領土の最終的処理について決定したものではありません。日本は、同協定に参加しておらず、いかなる意味においても、これに拘束されることはありません。



「ヤルタ協定」
出典：米国国務省広報局歴史部ホームページ
<https://history.state.gov/historicaldocuments/frus1945Maita/d503>

ポツダム宣言 1945（昭和20）年7月

1945年7月に出された「ポツダム宣言」は、「カイロ宣言」の条項を履行されなければならない旨と、日本の主権が本州、北海道、九州及び四国並びに連合国の決定する諸小島に限定される旨を規定しています。しかし、同宣言は、領土の最終的な決定をしたものではありません。

ソ連は、1945年8月8日に「ポツダム宣言」に参加しました。日本は、同年8月14日に「ポツダム宣言」を受諾しています。



「ポツダム宣言」
出典：米国国務省広報局歴史部ホームページ
<https://history.state.gov/historicaldocuments/frus1945BerlinQ2/d1382>

Part

03

Nature

北方四島 島と海の豊かな自然

北方四島周辺海域の自然環境

北海道の北東にあるオホーツク海は、日本とロシアの間に広がるとても自然の豊かな海です。アムール川河口付近の海は、塩分濃度がうすいため凍りやすく、冬になるとシベリアからの寒気に冷やされ氷をつくります。この氷は風と海の流れによる海流によって、北海道の北部から知床に接岸し、北方四島のオホーツク海側に流れつく「流氷」になります。オホーツク海の流氷は、世界の海域で南限にあたります。太平洋側は寒流が流れているため、生物生産性も高く、世界で最も生き物の生態系が守られた自然豊かな地域となっています。

流氷は、植物プランクトンが含まれており、流氷が接岸すると増殖し、水中に放出され、貝や魚のエサになります。

また、親潮や東樺太海流^{（ろがしからふと）}にのってニシン、ホッケ、サケ類、タラ類などが来遊し、黒潮にのってマグロなどもやってきます。北方四島は、豊かな生態系が存在する恵まれた自然環境が保たれた貴重な地域です。



北方四島に棲息する野生動物たち

ラッコ 絶滅危惧種IA類（CR）



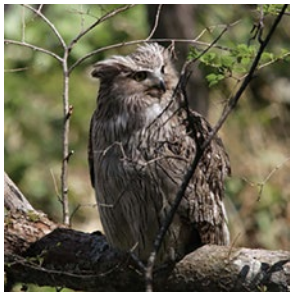
ラッコの群れ（外山雅大氏撮影）

体長約1mのラッコはあお向けになりながら^{（せい い すく）}棲息し、眠るときも海藻に体を巻き付けて眠る大変愛らしい動物で、今では水族館などで見れる大変人気がある動物です。

しかし、ラッコの毛皮はなでつけるとどの方向にもなびくと言われるほど上質なものとされていたことから、18世紀半ばから始まった乱獲によって一時絶滅寸前まで追い詰められました。その後、懸命な保護活動により徐々に回復していきました。

北方四島では主に択捉島、歯舞群島で棲息しています。近年の調査では歯舞群島の6島でラッコが確認され、歯舞海域がラッコの棲息場所の中心で繁殖活動も行われていることも分かっています。

シマフクロウ 絶滅危惧種IA類（CR）



シマフクロウ
環境省ホームページ
(<https://www.env.go.jp/nature/klaho/hogozoushoku/shimafukuro.html>)

シマフクロウは世界最大級のフクロウです。北海道では約140羽しかおらず、絶滅危惧種として認定されています。

1990年代から2000年初頭にかけて国後島^{（くにしろとう）}で行われた棲息調査により約80羽という非常に高い密度でシマフクロウが棲息していることが分かっています。

その理由として、1つ目は主食の魚が豊富にあること、2つ目は巣を作る樹洞^{（しう どう）}が整っていることが言えます。また、最近では色丹島^{（しこたんとう）}に設置した巣箱でシマフクロウが繁殖したことも調査により分かっています。

このことから、シマフクロウは海を越えて北方四島や北海道本島東部などを行き来しているのではないかと考えられます。

ヒグマ



国後島で撮影された白いヒグマ
（撮影：国後島白いヒグマ研究グループ）

北方四島では、択捉島と国後島にのみヒグマの棲息が確認されています。択捉島、国後島に棲息するヒグマの数は、知床半島に匹敵するほど高密度に棲息しています。また国後島のヒグマの約1割は世界的に見ても珍しい白いヒグマです。

択捉島、国後島に棲息するヒグマの密度が高い理由として、両島にはエゾシカが存在しないため植物が豊富であること、またサケ・マスなど遡上^{（さうじょう）}する魚が豊富であることが考えられます。

ヒグマは冬になるとササの葉を敷き詰めた穴の中で冬を過ごしますが、冬眠前が一番栄養価が高く、皮下脂肪が蓄えられているためマタギ（猟師）はそこを狙って捕っており、そのころに捕った肉は、牛肉や豚肉、馬肉^{（ばにく）}よりも美味^{（うまい）}であったと言います。

昭和14年頃（1939年頃）にはヒグマを一頭捕ると役所から条例金10円（現代価格で約2万円～3万円）が支払われたということです。

北方四島と北海道本島東部のヒグマ

世界中にいるクマの種類の中で最も広い範囲に分布しているヒグマは、日本では国後島や択捉島を含む北海道にのみ棲息しています。

一般的にヒグマと言えば右の写真のような茶色い毛を想像するかもしれませんが、実は金、銀、シナモン、黒…と地域によって様々なヒグマがいます。

その中でも国後島には、世界的にも珍しい上半身（頭・顎・肩・前足）が白色、下半身が灰色～茶色の「白いヒグマ」が約1割棲息しています。

国後島に白いヒグマが多く棲息している理由は、上半身が白い方が水中から見て目立たないためサケ・マスに警戒されにくく捕獲率が高い可能性があること、ヒグマ、特に仔グマの「天敵」であるオオカミが棲息していなかったために生存上、不利にならなかったことが挙げられています。

食性分析では、国後島と択捉島にはエゾシカが棲息していないため、サケ・マスが遡上するまでは主に草本類やその根を、サケ・マスが遡上した後はサケ・マスを中心に食べていました。個体別の食性履歴分析から、北海道本島のヒグマと比べて食性の個体差がとても小さい、つまりどの個体も季節に応じて同じようなものを食べていることが分かっており、豊かな資源が豊富にあることを示す証拠と考えられています。



国後島で撮影されたヒグマ（撮影：国後島白いヒグマ研究グループ）



国後島で撮影された白いヒグマ（撮影：T. Shpilenok 氏）



国後島で撮影された白いヒグマの親子（撮影：Dimitry Sokov氏）



国後島で撮影された白いヒグマ（撮影：Dimitry Sokov氏）

世界のヒグマは6つの分子系統に分かれています。国後島・択捉島のヒグマは北海道本島の知床半島から阿寒湖周辺にかけて分布するヒグマと同じグループに属していることが体毛や体組織の調査で分かりました。これは地理的に近いことが関係しています。

北方四島の「白いヒグマ」はいつから知られていたの？

江戸時代後期、松前藩の蠣崎波響が描いた『夷酋列像』があります。この絵には12枚のアイヌの首長が描かれ、1789（寛政元）年5月に起きた「クナシリ・メナシの戦い」を治めるため、松前藩に協力した有力者たちとされています。

この1枚の絵には、「白と黒の仔熊」を連れたアッケシ（厚岸）のバラサンの首長イニンカリが描かれています。

イニンカリは、交易で得た中国製衣装（蝦夷錦）をまとい、山丹槍を手に持っています。ここに描かれた「白と黒の仔熊」は、当時の北海道東部のクナシリ・メナシ地方のアイヌと松前藩、さらに江戸幕府との交易品であったと考えられます。

このように国後島の「白いヒグマ」は、18世紀末の江戸時代後期から知られており、その棲息はさらに古く遡る可能性もあります。この国後島の「白いヒグマ」は、北方四島の専門家交流の研究成果でもあり、ヒグマの生態を知る手がかりとなっています。今後の研究の進展が期待されます。



イニンカリ図
図書裡会 1988【蠣崎波響 夷酋列像】より複写
市立プザンソン美術館所蔵「夷酋列像」

北方四島に棲む動物たち

エトピリカ・シマフクロウ

北海道本島東部と北方四島の自然環境はよく似ています。共通して棲息、繁殖する鳥類が多く存在していることも知られています。また、カムチャッカ半島、千島列島、日本列島が渡り鳥のルートになっており、多くの鳥類が春と秋に北方四島を通過します。

ここでは、北方四島を代表するエトピリカ、シマフクロウを紹介します。

エトピリカ

エトピリカは、アイヌの言葉で「エト」はくちばし、「ピリカ」は美しいという意味があります。綺麗なクチバシと目の上の長い飾り羽が特徴です。その風貌から別名「花魁鳥」とも呼ばれ、北太平洋に分布し、約300万羽棲息していると考えられています。



エトピリカ (根室市提供)



「百鳥図 (増山雪斎画)」
(国立国会図書館デジタルアーカイブ)

エトピリカ(右)は、「百鳥図」(増山雪斎画)に描かれたエトピリカです。
「エトウヒルカ (エトピリカ) 西蝦夷カラフトの海辺で捕獲」と記されています。
増山雪斎は、伊勢長嶋藩藩主であり、文人画家としても知られています。

シマフクロウ

シマフクロウは極東地域に分布域を持ち、日本では北方四島、北海道本島東部に棲息する世界最大級のフクロウです。全長70cm、翼を広げると約180cmに成長します。

広葉樹の大木の樹洞に巣をつくり、河川や湖畔で魚やカエルなどを捕食しています。20世紀はじめは北海道全域にシマフクロウが棲息していましたが、森林伐採などにより巣をつくるための大木がなくなり、また河川改修やダム建設により、餌となる生き物も少なくなったため、現在は限られた地域で見られる大変稀な鳥です。



シマフクロウ
環境省ホームページ
(<https://www.env.go.jp/nature/kiisho/hogozoushoku/shimafukuro.html>)



「錦窠禽譜 (服部雪斎画)」
(国立国会図書館デジタルアーカイブ)

右のシマフクロウは、「錦窠禽譜」(服部雪斎画)に描かれたシマフクロウです。
右下には「北海道之産、明治五(1872) 壬申八月廿二日、博物館工来ル。同月三十日写、雪斎草稿」と記されています。

この「博物館」は、現在の東京国立博物館の前身です。当時、服部雪斎は、同館の動植物研究部門に属していました。

北方四島と北海道本島東部のシャチ

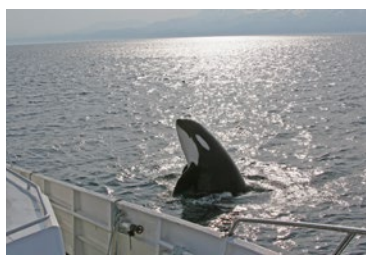
シャチは、日本では主に根室海峡や釧路沖といった北海道本島東部から北方四島周辺海域にかけて季節的に来遊が確認される、海洋系食物連鎖の頂点に立つ動物です。武器を使うヒトを例外にすると自然界に天敵は存在しません。

また数頭から数十頭ほどのポッドと呼ばれる群れを作って生活し、非常に社会的な生活を営みます。群れはメスを中心に血の繋がった家族で構成されていると考えられ、狩りをするときは協力して獲物を追い詰めていきます。北方四島周辺海域は、豊かな漁場であり、豊富な魚を餌に鯨類やシャチが多く来遊・棲息しています。

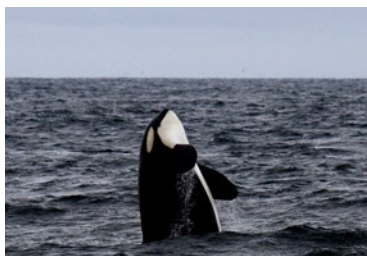
アイヌの世界観では、動植物や自然現象、病気や器物など、この世のあらゆる無形・有形のものがカムイ（神、精霊）であるとされています。そんな世界観を持つアイヌは、シャチもまたレプンカムイ（沖の神様）と呼んで信仰の対象としており、昭和初期までその祭事が余市町の稲荷神社で行われていたと言われています。



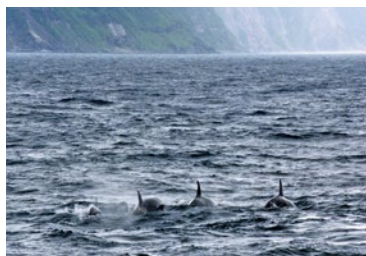
子供をつれたシャチの群れ (写真提供: 笹森琴絵氏)



シャチのスパイホッピング (写真提供: 笹森琴絵氏)



シャチのブリーチ (写真提供: 笹森琴絵氏)



択捉島のシャチの群れ (写真提供: 笹森琴絵氏)

白いシャチ

世界自然遺産・知床の北海道羅臼町沖の根室海峡で2019年5月16日、白いシャチが目撃され、「北海道シャチ研究大学連合」の大泉宏・東海大教授が撮影に成功しました。日本近海での撮影は極めて珍しいものです。

通常のシャチは背中が黒く、目の上方や腹などが白いのが特徴ですが、今回のシャチは全身がほぼ白く、過去にロシアの研究者が同様のシャチを撮影した際は「アイスパーク（氷山）」と名付けられたこともあります。

根室海峡とは羅臼町と国後島にはさまれている海峡のことで、約10頭の群れの中に白い雄のシャチがいるのを発見し、写真に収めました。



白いシャチ (観光船「はまなす」杉田知香氏撮影)



白いシャチ
(写真提供: 東海大学海洋学部・大泉宏氏撮影)

北方四島の捕鯨

北方四島のひとつである色丹島^{しこたんとう}は、北海道本島東南部にある根室半島の延長にあり、納沙布岬^{のさつみ}から73.3キロ離れた面積251平方キロメートルの島です。その中心地、斜古丹^{しやこたん}には、かつて東洋一といわれた捕鯨場^{ほげいじやう}があり、クジラ漁でにぎわいました。

捕鯨場があった斜古丹湾の風景やクジラの解体^{ひきあ}、引揚げをとらえたものの写真がいくつか残っています。東洋一の捕鯨場が色丹島にはありましたが、択捉島^{えとろふとう}でもクジラ漁は盛んにおこなわれていました。捕鯨は、漁師と巨大クジラとの命がけの大仕事です。無事、船がクジラを捕らえて戻ってくると、子どもたちが駆け寄ってきて、その様子を見学したといわれています。

油を取るなど様々利用できるため、残すところがほとんどなかったクジラの解体作業^{かいたい}に取り組む様子が今でも写真で記録され貴重な資料として残されています。



択捉島の駒井漁業場でクジラの解体作業
千島歯舞諸島居住者連盟提供



斜古丹捕鯨場で解体処理する作業風景
千島歯舞諸島居住者連盟提供

色丹神社（鯨骨神社）



色丹神社（1935（昭和10）年撮影）
千島歯舞諸島居住者連盟提供

色丹神社は、シロナガスクジラの顎^{あご}の骨を使用して、もう一つの鳥居をつくっています。鯨の骨でつくられた鳥居を鯨鳥居といい、鯨骨神社とも呼ばれます。

日本で最古の鯨鳥居は、和歌山県太地町の「恵比須の宮」の鳥居です。このほかに、長崎県有川町の海童神社、日本統治下の台湾の最南端の鰲鑾鼻^{がらんび}にあった鰲鑾鼻神社、樺太^{からふと}にあった札塔恵比寿神社、この色丹神社の5ヶ所にありました。

鯨鳥居がある神社は、捕鯨に直接かわりがあるものと、捕鯨基地などの間接的にかかわるものの信仰の象徴^{しやうしやう}とされています。

色丹神社をはじめ、北方四島にあった神社は、現在、根室金刀比羅神社に11体の御神体を移し、各社例祭日には祭典が行われています。

北方四島と北海道本島の自然「植物編」

くなしりとう 国後島

国後島の植物は北海道本島の植物と関係が深く、面積の割に植物の種数が多いことで知られています。樹木ではエゾマツ、トドマツなどの針葉樹が多く見られます。

オホーツク海沿岸には暖流の影響で温帯性の落葉広葉樹林もみられ、ホオノキ、カシワなどは国後島に分布の北限があります。海岸段丘草原や湿原の植物も発達しています。

針葉樹が多いことから、国後島各地には製材工場が存在しており、そこで加工された木材は主に根室地方へ出荷されていました。

営林署の払下げも針葉樹が大半であることから、島民の燃料として豊富な針葉樹が使われていたことがわかります。

また明治時代に国後島から移入されたチシマザクラが根室市の清隆寺に植栽されています。



チシマザクラ
根室市観光協会提供

えとろふとう 択捉島



トド樹木
(地物) 北海道立総合研究機構提供



択捉島のグイマツ原
(撮影：福田知子氏)

択捉島には針葉樹を中心とした豊かな森林植生がみられ、単冠山を中心として東北部、中部、西南部と大きく3つの森林相に分ける説があります。

南部はエゾマツ・トドマツ林、中部はグイマツ・トドマツ林がみられ、北部の留茶留原以北ではダケカンバ低木林が発達しています。

択捉南部のオホーツク海側には、ミズナラを中心とした広葉樹林が分布しています。火山が多く、標高の高い所には高山植物が発達する一方、湖沼の水生植物も豊富に見られます。

しこたんどう 色丹島

色丹島は高山植物の宝庫と言われ、特に北部～東部の断崖上に花畑が見られます。全体は緩やかな丘陵地形で、草原や丈の短いササ原が発達しています。

色丹島にはハイマツが無く、代わりにミヤマハイビャクシンの群落が見られます。また、北海道本島では絶滅したグイマツが南西部のごく一部に残っています。

色丹島では一部に矮小化する植物が見られ、中でもシコタンマツ(グイマツ)、シンバク(ミヤマハイビャクシン)などの短小奇形のものは盆栽や庭木用の愛好家に珍重されていたと言います。



色丹島のグイマツ
(撮影：福田知子氏)

はほまいぐんとう 歯舞群島

根室半島の延長と言われる歯舞群島は、いずれの島も平坦で、面積1km未満～51km²(志発島)の小島が集まっています。樹木より草本が優勢であり、木本種が欠けている島もあり、草原・湿原・湖沼・海岸植生などの植生が知られています。

島々では、ヨモギなどの茎が硬い草をかまどの火をつけるために使用したり、風雪よけの囲いなどもそれらで補っていたそうです。



ハマトコヨモギ
(北方対策本部HP)